大館の歴史散歩

火内の山々①

鳳凰山〈上〉

大館盆地の東方、高森山塊の中にあって、ゆったりとした姿で盆地内を見守っている鳳凰山は、「ふるさとの山」と呼ぶにふさわしい。

数千年あるいは数万年の昔から、先人たちはこのおおらかな山に親しみ、大館の地で連綿と生活を営んできた。しかし、先人たちがこの山を何と呼んでいたかは知るべくもない。

現在、私たちが鳳凰山と呼ぶ標高五二〇・四㍍の、さほど峻秀でもないこの山に「鳳凰」の山称が付けられたのはいつのことであろうか。また、だれが名付けたのであろうか。このことについて考えてみよう。

大館地方において、鳳凰山という名称が歴史的に判明している最も古い例は、「鳳凰山玉林寺」すなわち玉林寺の山号であろう。

玉林寺の開創は、その縁起に十六世紀中ごろのこととして（一説に大永七年＝一五二七）、比内地方（米代川中流域、大館鷹巣両盆地一帯の古称）の領主浅利則頼がこの山で狩りをした際、山上で松原補陀寺閑居草菴守瑞禅師が座禅をしているのに出会った。守瑞禅師のそばでは小鳥たちが無邪気に遊んでいた。それを見た則頼は、守瑞禅師を開山としてこの山のふもとに一寺を建立し、浅利氏代々の牌所とした。この寺が鳳凰山玉林寺であるという。

そこで玉林寺の山号「鳳凰山」に関して次の二つのことが考えられる。一つは、すでに鳳凰山と呼ばれていた山のふもとに玉林寺を建立し、その山号を鳳凰山としたという考え方で、今一つは、この山のふもとに鳳凰山玉林寺を建立したので、この山をそれから鳳凰山と呼ぶようになったという考え方である。

玉林寺建立時にどちらであったかは、現在の段階では不明である。けれども鳳凰山の呼称が玉林寺の山号として十六世紀中ごろの大館地方に存在したことは確かで、しかもこの呼称には浅利氏が深くかかわっているように思われる。

次回は、別の視点から鳳凰山の名称を探ってみよう。

市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

「小説瀬戸大橋」

井口　泰子（福武書店）

地元徳島出身の著者が、綿密な取材をもとに瀬戸大橋ルート決定から建設までをめぐり、その苦闘を描く。

一般書

◇静寂の声 上・下（渡辺淳一）◇大阪迷走記（阿部牧郎）◇よつ葉のエッセイ（俵万智）◇わが師父井上成美（篠田英之介）◇途中下車の味（宮脇俊三）◇落語としての哲学（福田定良）◇歴史のねむる里へ（永井路子）◇窓は茜色（佐藤愛子）ほか

児童書

◇雨のにおい星の声（赤座憲久）◇父さんの小さかったとき（塩野米松）◇まんがで学習年表日本の歴史〔全5巻〕（あかね書房）ほか

5月のテーマ関連図書コーナーは『東北を知る』です。

親子読み聞かせ会は毎週金曜日午後2時30分から。

中央図書館の休館日は5月26日です。

とき・7月22日（金）午後6時30分開演
ところ・市民文化会館　大ホール
入場料・S席　2、500円
A席　2、000円
B席　1、500円
（チケットの発売は6月15日からです）